

常滑市民俗資料館

友の会だより

第17号



常滑市西阿野「濱口屋」玄関

平成7年3月発行(1995)

常滑焼の歴史について想う（一）

柿田 富造

1. はじめに

常滑焼の歴史は、長い間諸先輩によって、いろいろな角度から語られ、また著者となって、われわれに多大の情報を提供してくれている。

筆者はそうした著書をいつも座右に置いて参考にしてきたが、最近気がかりな事を考えるようになった。というのはこの10年来活発になってきた考古学による発掘調査だとか、産業遺産の研究・郷土史などの成果によって過去の歴史が逐次改訂されてきた。しかしそれにもかかわらず、常滑焼の歴史を紹介しようとする新しい編著者の中には、従来の資料のみで執筆している者も見受けられる現状にある。

従ってこれからは、歴史は絶えず書き換えられるものである事を認識し合い、しかも常滑焼が歪曲されないように皆で心がけていくことが肝要だと思う。そうした意味において次に筆者なりの所見を述べることにする。

2. 改訂すべき主な史実

(a) 行基焼

昭和戦後になっても、知多・渥美半島の古窯の焼物を敢えて行基焼と書いている著書がある。その著者は中世常滑窯と奈良時代の行基とは時代錯誤のあることを充分承知の上で書いているのだが、一般読者の中には間違っただけで解釈する可能性もあるので、そうした表現はやめた方がよいと思う。しからば知多半島の中世古窯を総じて何と呼んだらよいかと質問されると、別に統一されている訳ではないので戸惑うところではあるが、最近の考古学では「中世常滑焼」と一括して呼んでいる傾向も見られるので、その辺が妥当ではないかと思われる。

(b) 赤羽・中野編年

昭和62年に武豊町中田池古窯から紀年銘のある陶硯^{トウケン}が出土した。ところが同じ窯跡から口縁^{コウケン}部断面が完全にN字状になった甕^フや広口壺^{ヒログチ}が出土したために、昭和59年に発表された赤羽編年表を50～100年修正する必要が起きてきた。そして発掘調査に当たった武豊の奥川弘成氏、および常滑の中野晴久氏の努力によって新しい編年表の問題が提起された。そこで日本福祉大学では、昨年全国の考古学者らに呼びかけて、「中世常滑焼をおって」シンポジウムを常滑で開催し、新たに赤羽・中野編年表を提示して、全国的な規模で周知徹底をはかっている。



常滑焼の編年表を変えた紀年銘陶硯

(c) 禁窯令説

天正2年（1574）の織田信長の朱印状は、「尾張領國中、瀬戸以外に陶窯を築くことを禁ずる。」と書かれており、常滑窯に壊滅的な打撃を与えたと、かねてから伝えられてきた。この禁窯令説は昭和10～15年に編纂された「愛知県史」第1巻が初見であって、以後定説とされていたが、赤羽一郎氏は著書「常滑」（1983）で朱印状は常滑窯には影響を与えるものではなかったと述べている。そして今ではこの赤羽説が一般的通念とされている。

楽家の窯場

第15代 楽吉左衛門訪問・見学記

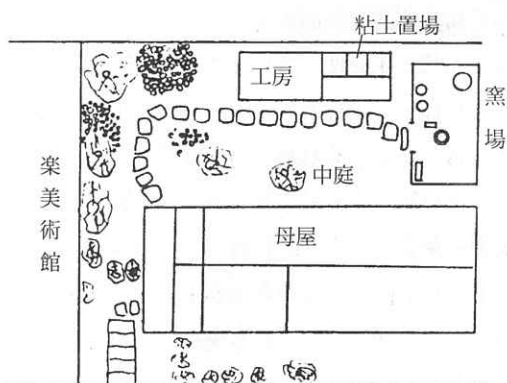
昭和59年9月9日見学 水上 健（記）

当時、私が勤務していた常滑市立陶芸研究所で、『楽』の展示会を企画し、『楽』の御本家を訪れて話を聞きたいと願っていたところ、かねて「カルロ・ザウリ展」開催の折り、大変お世話になった京都・志野陶石(株)を通じて楽家にコンタクトしていただくことができ、9月9日「重陽の節句」を吉日として実現した。当日は天候にも恵まれ恩妻同道の上、京都で志野陶石の西島智子さんと合流し、堀川中立売の楽家を訪れた。

暫く隣接の『楽美術館』で楽家歴代の作品を見せさせていただきながら待った。千利休とかかわって楽茶碗を創った長次郎以来四百年間、千家十職の一つとして15代にわたり、営々として楽茶碗を中心とした「楽焼きの茶道具」を作り続けてきた。この楽家に伝来する品々は、日本の焼物の歴史に強く影響を与え続けた「茶道」という日本固有の伝統文化の主役を演じた由緒ある品ばかりである。いずれも大切に使われ、手触りの良さそうなにい輝きを放ち、歴史の重味を感じさせる素晴らしいものばかりであった。展示された写真でみる楽焼きのシーンは、気迫に満ち溢れ「戦場と化した窯場」は、まさに「炎との格闘」と表現しても異論は無かろう。焼物、特に陶芸に関わっている者にとって最近の「窯焼き」の概念は「竈をくべる」と同様、せいぜい焚き口に薪や、或は石炭を投げ込み色見孔から噴出す赤い炎や黒々とした煙をのぞき込むことが、窯との格闘らしきものであろう。電気窯やガス窯においては窯との格闘を伴った「窯焼き」の概念からは程遠く、焼き固めるた

めの「化学的熱処理」か、或はもっと卑近な言い方をすれば、台所のオープンで「料理」するのと似ているのではなかろうか。ともあれ楽家代々の名品を見て回っているうちに母屋から準備が整ったとの知らせを受け、改めて藍染の暖簾をくぐり楽家の玄関に入った。

当主第15代楽吉左衛門氏は東京芸大彫刻科を卒業後、家業を継がれた。従って芸術について造詣が深く、外に対しても活動的で、古い枠の中で新しい「楽」を創造し、更に芸術性を高めるには、うってつけの人物と見受けた。庭に面した八畳程の座敷に通され、最近の作というちょっと乾山に似て角張った浅目の黒楽茶碗でお茶を一服頂いた。楽さんは終始、座敷の向こう側できちんと正座して話をされたのが印象に残っている。話が終わってから特に許され窯場を見せていただくことになった。(1図)



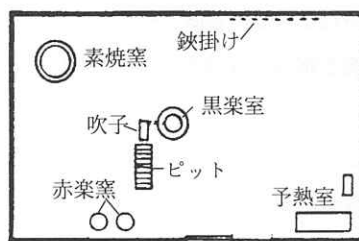
1図 楽家の配置図

玄関に続く土間の奥を通り抜けると中庭に出た。路地の両側の庭に焦げ茶色の拳大か、やや大きめの石が少し盛り上がり無造作に転がっていた。楽さんに尋ねると「加茂川石」とのこ

と。左側の小さいほうの石は50~100mmφ程の丸い石ころ状であった。昔から使用しており川原より採ったものである。残り少ないとはいえまだまだ2、30年使用する量は十分あるとのこと。反対側のやや大きな塊の方は、最近山から採ったもので20~30㎏φのゴツゴツした岩の塊りであった。加茂川石は一時期出荷が途絶えていたが、再び出荷されるようになったので、先代が買い置かれた由。続く左手の小屋が成形の工房、今風にいえばアトリエ。何時の頃からかは知る由もないが、歴代の吉左衛門が黙々と土を捻り、茶碗を削り出していた場所と思うと一寸だけ中を覗いてみたい衝動に駆られ、望んだが「何もないですよ」と軽くかわされた。軒先には先代・先々代の「削り滓」や生の茶碗の不良品が、それぞれ作者別に木の樽の中に収めてあり、現在もこれを一定の割合で新しい粘土に混ぜて使っている由。その隣には板で間仕切りした、間口1間×奥行2間程の屋根付の粘土置き場が3つ程あり、原料の白っぽい粘土が置いてあった。楽さんが「これらの土は京都の南の方の山から出る粘土で、あちらは先々代が、こちらは先代が採り溜めておいた土です。今、私は先々代の土を使っています。」と説明された。先代の採った土は高さ1.5米程あり、約10立米・15トン位。これだけでも2代分はあるという。使用量の少ないことは頭では理解できるが、実際の量を目の当たりに見ると「なるほどこんなものか」と、一般の陶磁器工場の使用量がこびりついた頭に、余りにも少なすぎる量を納得させた。

その先にある納屋風の建物が目指す「窯場」であった。木造で間口5間×奥行2間位の広さは想像していたより狭かった。ここは女人禁制であるが当日は特別に入れていただいた。入り口を入ったところの土間に、大きな「匣」のよ

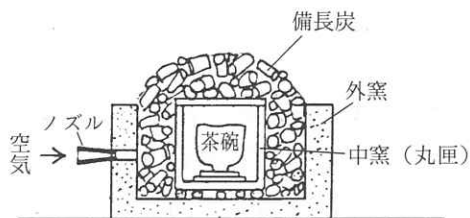
うなものが2・3個置いてあるだけで窯らしいものが見えない。窯はてっきりこの建物の軒先か或は裏にあると思い(私)「窯は何処にあるのですか?」(楽さん)「これです。」(私)「えっ?」(楽さん)「この足元の丸いのが窯です。」(私)「?!」。私は自家の楽窯や、今まで見た薪や油焚きの「楽窯」を頭に浮かべていたので、もっと窯らしきもの(?)を想像していたので少なからず拍子抜けした。窯場内の配置は入り口辺りが「黒楽用の窯」と道具類、左手前は「赤楽用の窯」、そしてその奥の右側には「素焼窯」が置いてあった。窯場の床は土間で、壁と天井は耐火粘土のようなものが漆喰のように塗り込められ、火災防止が図られていた。流石400年の伝統と感心した。(2図)



2図 窯場見取図

「黒楽の窯」は農家の土間にある「竈^{かまど}」を連想させた。内径50㎝×高さ(深さ)25㎏、厚味5~6㎏程の耐火粘土製で、側面に送風用の丸い孔を開けた厚目の丸匣といった円筒形をしていた。窯を焚くときは、先ず「中窯」(匣鉢)の中に丸板の焼台とその上に三つ又のトチ(焼台)を置く。その「中窯」を窯の中心にかん玉(耐火粘土を玉にしたトチ)をかってセットする。窯の横に吹子(ふいご:手動送風機)をセットし、送風管(ノズル)を取り付ける。又、予め素焼き、施釉した茶碗を、次回の窯入れに備えて予熱するための「予熱窯」は、丁度鰻の蒲焼きコンロのような横長(1.5米位)の窯で、

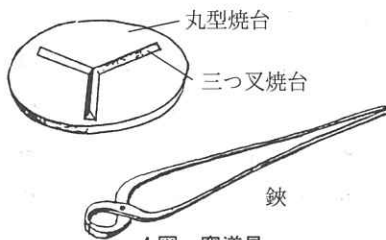
密閉されていないので窯とは呼べない窯(?)であった。これに炭をおこし、茶碗をロストル(鉄棒)の上に乗せて加熱する。これは予熱には違いないが「茶碗を焙る」といった感じで、十分な温度まで予熱出来るかと少々疑問を感じた。(3図)



3図 黒楽窯

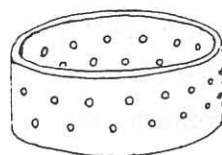
窯は夜中のうちに火を入れ予熱にかかる。先ず窯本体の中心にセットした丸匣型の「中窯」に蓋をし、周りに備長炭を詰め込む。窯本体の横の空気吹き込み穴に焼物の筒(ノズル)を差し込み、「ふいご」に連結する。「中窯」の周りや上に備長炭を充填した後点火し、吹子^{ふいご}を吹いて空気を送り窯を徐々に加熱していく。窯が十分に熱せられた後、中窯の蓋の上の炭を払い落とし、蓋を開け予熱してあった茶碗を「鉗」で挟んで中窯の中へ入れて蓋をする。中窯の周りに手速く備長炭を入れ、鉄棒で突きながら高密度に充填する。中窯の上にも炭を山盛りに盛る。同時にピットに入った吹子係は吹子を押し窯に空気を送る。送風の手を休ませては温度が上がらないので、吹子を押し手は休むことを許されず大変な重労働である。この作業は「村の鍛冶屋さん」いや「刀鍛冶」の仕事に合い通ずるところがある。この窯は1回に1個だけしか焼けない。そして1個の「黒楽茶碗」を焼き上げるのに要する時間は約1時間で、1回の火入れて約20個を焼き上げ、丸1日の「窯焚き」である。焼き上がった頃を見計らって吹子を止め、蓋の上の炭を払って蓋をとり、真っ赤に焼けた茶碗を鉗で掴んで取り出す。そして予熱してあっ

た次の茶碗を鉗で挟んで中窯に入れ、手早く蓋を閉め、備長炭を充填して吹子を吹き始める。取り出した茶碗は鉗で挟んで水の中に突っ込み急冷して焼き上がりとなる。以後、前回と同じことを繰り返す。(4図)



4図 窯道具

窯場の奥まった方には「赤楽の窯」が二つあった。黒楽の窯よりは窯らしく、直径約90~100糎、高さ40糎程の大きな丸匣型で、周りに直径6糎程の丸い孔が2段に開けられていた。赤楽は窯の中に施釉した茶碗の素地を裸のまま4個程入れ、その周りに炭を充填して焼くようである。赤楽茶碗で青黒く発色するのは、焼成時に炭が茶碗に接触して還元された箇所^{箇所}で窯と焼き方を見ればうなずける。(5図)



5図 赤楽窯

赤楽窯の右手奥に「素焼き窯」があった。他の二つの窯よりやや大きく、窯らしい窯であった。

楽家のすべての窯には煙突がなく、窯から噴き出した燃焼ガスは、一旦窯場の中に充填した後屋外に放出されるようであった。

楽家の工房と窯場を見学させていただいた感想として、400年の伝統を守り、現在普通に使われている製陶設備のほとんど何物をも使用せず、楽家の伝統を堅持して黙々と茶道具を作っ

ていることに驚くとともに、畏敬の念を感じずには居られなかった。

楽焼き 普通の本焼と異なり予め窯を熱しておき、その中へ素焼き・施釉・余熱した焼成物を入れ、30～60分位、釉薬が熔けるまで焼成し、鉄でつまみ出し、水中に入れ急冷する。粗陶器。手に持った肌触りに温味が感じられ、茶陶として珍重されてきた。

黒楽 唐土（酸化鉛）を多く加えて低温で熔融するように配合した釉薬に、鉄分（酸化鉄）を多く含んだ加茂川石などを加えた釉薬を掛け、約1100～1150℃で還元炎焼成して黒色に焼き上げたもの。

赤楽 酸化鉛を多く加えた低温で熔ける透明釉又はやや乳濁した釉を、赤土又は白土の表面に赤土を化粧掛けした素地の上に掛け、約1000℃位までで酸化炎焼成し、黒楽と同じように処理したもの。仄かな紅・赤色で茶陶として好まれている。

中窯 普通の窯の「匣」に相当するもので、燃料中に含まれる灰分等から焼成物を保護するために密閉できるもので、楽窯の場合は焼成するものによって異なるが、茶碗の場合は直径25糎×深さ25糎位の胴返し（縦横同寸法）の耐火粘土製の丸匣であった。

焼台 茶碗などを焼成するとき、底がくっつかないために用いる窯道具の一種で、この場合は楽茶碗の高台がくっつかないように三叉になった「トチ」を用いていた。

加茂川石 酸化鉄を多く含んだ岩石で黒楽釉の主原料。

備長炭 びんちようたん うばめ樫を焼いて作った木炭で、堅く火持ちが良い。身近では鰻を焼くのに使われている。

この見学から約十年経て、最近NHK・TV

で楽家の楽茶碗制作の様子が放映された。柿田氏が録画されたVTRを見せて頂いたところ、私の見たものと多少異なり、いろいろな点で納得のできる改良点が見られたので追記する。

粘土 三代前（曾祖父；十二代弘入）が伏見の山で採ってきた粘土を使っている。

成形 茶碗の成形にはろくろを一切用いないのは周知の通りである。まず、粘土を一玉掌にとり、直径20～22糎、厚み3～4糎程の厚い円板状に伸ばす。その粘土板を丸い皿板の上のせ、珪砂を撒いた作業台の上に載せる。端の方から摘みながら碗状に伸ばし茶碗の外形を作る。それを細工しやすくなるまで室（箱）の中でねかせてから取り出し、外側はほとんど手を加えずに内側のみを金篋で削り成形する。裏返して高台を削り出す。（6図）



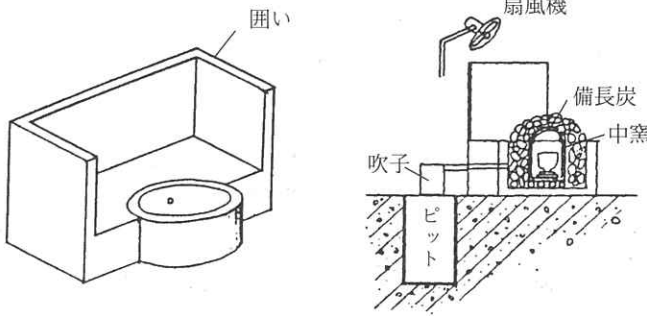
6図 楽茶碗の作り方

予熱窯 鰻の蒲焼き用コンロのようなものと記したが、今回見たのは丸匣型で二重になっており、外窯は凡そ内径35～40糎×深さ15～20糎×厚さ3～4糎で、その内側に内径20～25糎×深さ15～18糎、厚みは1.5～2糎位の丸匣状中窯より成っていた。そして中窯の中で予熱した茶碗を楽窯に入れ焼成していた。窯の底部が赤くなっているのが見られたから、800～950℃位で予熱しているものと思われる。

黒楽窯 丸い匣状の窯と記したが、今回見たのは吹子側にコの字型の粘土または焼物の囲いが設けられ、その内側が窯の上端まで埋められており吹子側の半分が平面になっていた。また、中窯の蓋は半球型をしており天頂と裾

の半ばの位置に直径3～4寸の丸い色見孔が開けられていた。焼成時は蓋をして炭に埋もれているが、焼上がる頃に蓋を開けて窯の中を覗いて見ることが出来る。また焼成時には

勿論吹子で送風し、炭の山から青白い火を吹いているが、それでもまだ風（空気）が不足しているのか、囲いの上に扇風機を置いて風を送っていた。（7図）



7図 改良された黒楽窯

釉薬 庭にごろごろと置いてある子供の拳大の石ころが、その昔加茂川から拾ってきたもので、水に濡れると暗い赤紫色になるのが良いとされている。黒楽の釉薬はこの加茂川石に唐土（酸化鉛）等を加えたものが主成分で、低温で熔融するように調製される。

富本家古文書より 時のひとこま

北川 副夫

富本家に残された文書の中にこんな事が記されています。わかりやすくしました。

拝借しました金子の事

金百両也 但し年々済

右は、今度お調べの通り鯛網が出来漁業致しましたに付て右の通り拝借しました金子のお返しの事は年々漁業の水揚金高をもって御指図次第にお返し致します。

天明元年丑五月（1781） 知多郡常滑村
網元 太郎左衛門
同村庄屋 太左衛門
同 組頭 崋兵衛

御国方御役所

鯛網壱帖

常滑村 太郎左衛門

拝借金百両

右は先達とお調べの上私共のお願いの通りにして下され其の拝借金にて鯛網が出来ましたので精出し漁業致す事にしました。右鯛は成るだけ他国には売らず、干鯛にして御領内にて売払い致したく思います。鯛、並びに油、共に御当地の納屋町辺り四屋と、今迄どおり大野村三郎兵衛、金八、常滑村伊左衛門、師崎村新兵衛にお願い致しました。口銭の事は、話し合いにて此の四屋へ積み送る事に致しました。積み送りました時には、右四屋にて代金何程と仕切書を取る事に致しました。又、御当地四屋に積み送る事も有りますので何町の誰れの所へ積み送りました事もお知らせ致します。海上にて買廻りの舟々への売払いしました分は、鯛何程、代金いくらと帳面に書き記すように致します。冬に至り漁業出来ません時は、四屋それぞれ仕切書を帳面共に役所に差出し間違いの無い様に心得取扱う様に致します。

右、拝借金のお返しの事は漁業揚り金高を、お調べの上返金の受状に其の旨を御書き下さる様にお願ひします。又、他国へは売出さぬ様に取扱います。万一風の模様等にて損なく売払い致しました事も有るかと思ひますが此の代金何

程と書き記し、其の訳も帳面差出しました時に申し上げる様に致します。

丑 六月

桑原藤右

秋の研修旅行 —越前を訪ねる—

増田 静子

11月10日お天気も良く、友の会々員41名は秋の越前へ向う。バスガイドさんの説明も順調に米原から北へ、トンネルを幾つか抜けて、身知らず柿というのか小粒の柿がびっしり色づいているのを見ながらやがて山道に入る。武生から西北にある宮崎村に、越前陶芸村が広い敷地をもって建物も立派なものが幾つかある。

その中の一つに文化交流会館があって平成6年(1994)5月の開館と新しい。円型の建物の中にはホール舞台があり、周りのロビーに展示品が飾られている。藁灰流し大甕。自然釉叩紋壺など、常滑焼にそっくりのが並び親しみを感ずる。又小さい物は「越前わらべ人形」や小壺の集まり「おしくらまんじゅう」等いずれも黒く小さく愛らしい。その並びに志野の茶碗があり、これは常滑の山田健吉さんの御子息山田さんの作品で、今この地で制作に励んでおられるそうだ。

交流会館を見学後すぐ隣にある山田さんの窯を見せて戴く。栗の木もある静かな一角に、作品を詰め終えて焚くばかりに仕度をした窯。志野を焼く為の窯で美濃の人に築いて貰ったとか、丸みを持って厚みのある感じ。薪が沢山積んであり明日から大事な窯焚きが始まるのであろう。

住居の方には、「健吉陶房」の看板が掛かり志野の茶碗や花活が飾ってあり、昔のがデンと据えられていて芸術家の家らしい。

山田さんの御案内で、この陶芸村の地内の広い芝生の中に立つ常滑の柴田正明さんの作品を見に行く。途中にイサム・ノグチの作品もあり、岡本太郎の作品等陶彫は全部で15点もあるとの事。柴田さんの作品は5mもあろうか、円錐形の上に球に棒をさした様なの、その上に円筒や帽子ありで「時に立つ」と題がついている。鉄色の肌が砲弾に扱われた様に、あちこち彫られて痛ましいと感じたのは私だけか。平和を願う意ならばよいけれどと思う。4個に分けて焼かれたらしいという大作である。広い敷地にゆったりと立つそれらの作品に常滑にはない活気を見て少し羨ましく思い乍ら次に向かう。

〽婿の作りし陶のオブジェの前に佇ち

カメラにおさまる陶芸の村 まき

この地方の家は切り妻屋根で紅殻を塗った柱に白壁の家が多く、美しい風景である。越前岬が近づいて海岸沿いの道に水仙の芽が20糎ほどにのび水仙畑がずつつづく。花の咲く頃が楽しみ。海沿いの正太郎という店にて昼食の後、海を見に出る。岩は黒くゴツゴツとして知多とは違う。この辺は柱状の岩が多く道路沿いにもそんな岩が見られる。

〽越前の海岸今日は波静か

かもめいくつか舞ふさま見えて まき

〽雪吊りの仕度も終えて冬を待つ

みやびの残る越前のまち 志津

五木ひろしの「越前有情の碑」呼鳥門等ガイドさんの説明にて車窓に見ながら滝谷寺へ。実は先頃「友の会だより」にのせて戴いた「三国船鞆漂流記」の中の竹内藤右エ門の墓と漂流者供養碑があるという性海寺を訪れる予定があったのだが、バスが近くまで行けず、だいぶ歩かなければならないというので残念乍らやめにして、その分滝谷寺をゆっくり見学する事になる。

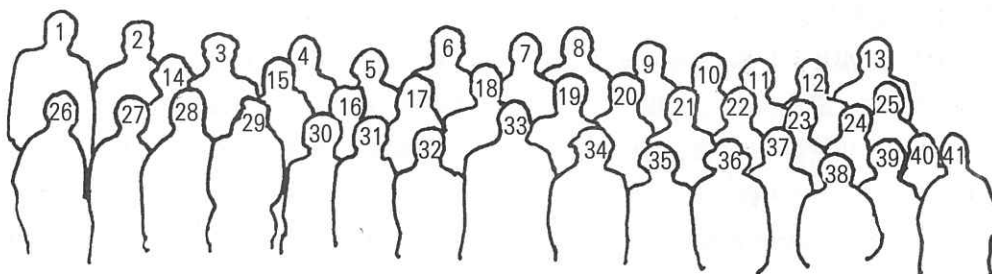
真言宗智山派摩尼宝山滝谷寺は、永和元年(1375)紀州根来寺の学頭睿憲の創建による。雪吊りも終り小さい木は縄でからげられた庭蓮池を通り、なだらかな坂に150米の参道の両側

の杉は江戸末期に植えられたもの。鐘楼門は柴田勝家の寄進によるもので元禄11年と昭和37年に改修。本堂に座し案内の方の説明を聞く。朝倉、柴田、松平など越前領主の祈願所として栄えたこの寺は戦火にあった事がなく、昔のままだそう。本堂には薬師如来を祀り、隣の観音堂には如意輪観世音菩薩をお祀りしてあり、観音霊場として信仰を集めている。本堂から観音堂へ渡る所の額に“摩尼宝山”とある。梵語で(心のままに)という意味だそう。

徳川中期の作らしいと言われる名勝庭園は自然の丘陵地を利用して小池を作り、手前につつ



秋の研修旅行—越前— (平成6年11月10~11日)



- | | | | | | |
|--------|---------|----------|----------|----------|----------|
| 1 衣川俊平 | 8 伊奈浜治 | 15 永柳一太郎 | 22 山本ひさ | 29 久保田忠男 | 36 榊原早知子 |
| 2 松本 泰 | 9 盛田宏明 | 16 佐藤久子 | 23 清水喜代美 | 30 竹村通子 | 37 都築千代 |
| 3 佐藤 茂 | 10 清水秋子 | 17 花井美穂 | 24 岩田英司 | 31 増田静子 | 38 市原まき |
| 4 成田智恵 | 11 神谷定子 | 18 伊奈拓雄 | 25 竹内真人 | 32 久田千代 | 39 肥田花子 |
| 5 鯉江ゆき | 12 伊藤房江 | 19 山田良一 | 26 水上 健 | 33 鯉江成一 | 40 清水ちず子 |
| 6 柿田富造 | 13 片山忠義 | 20 井上高二 | 27 竹内一江 | 34 竹内正一 | 41 関 花子 |
| 7 渡辺善次 | 14 八木卓久 | 21 松下修子 | 28 久保田良子 | 35 片岡利子 | (敬称略) |

じ等の矮樹を植え、石を置き。椎^{まき}等の巨樹を背景にして見事なもの。一巡拝見の後、宝物殿へ新しい建物の中に国宝の金銅毛彫宝相華文^{けい}磬や、重文の仏画とか古文書とか古い貴重な物が沢山飾られていた。

〽滝谷寺の庭にまします地藏尊の

笑まひやさしき石のかんばせ 早智子

ゆっくり拝見して秋の一日を堪能し、バスは山中温泉ホテル大黒へ着く。疲れ落しにと露天風呂へ行くと女の人が一人山中節を唄いながら入っている。なかなかのもので気分よく聞かせてもらい、旅に出たんだという思いに浸る。

〽山中節うたふ女^{ひと}あり紅葉の湯 静子

一大本山永平寺と朝倉遺跡を訪れて一

肥田花子

前日の疲れも快眠に癒やして窓を開ければ絶好の秋日和、幸先の良い朝だ、出発は8時半。

ゆるやかな蛇行のバスに揺られながら、外景やお喋りを楽しみ行くうちに永平寺に到着。

登る石段の参道の右手には、二抱えもありそのような老杉が亭亭と聳え立ち、いやが上にも深山幽谷のたたずまいを壮重にさせている。若い修業僧の説明をきき、堂内を案内して頂く。

回廊が迷路のように続いているが、それでも迷子になる事もなく、通る廊下はチリひとつなく、顔がうつる程の清潔さである。参拝者にまじり作務衣姿の若い僧が忙しそうに往き来する。

〽足弱き吾等を気づかひくる人に

従きてめぐりぬ広きみ寺を まき

ここ永平寺は、福井市東部に位置する。全国でも有数の禅寺で、道元禅師が、中国の宋より帰朝して宇治に十年住まわられて後、越前に赴き開創した。当時は大仏寺と称したが、翌年(1246年)、寺号を永平寺と改めたとあり、此処より6キロ余りの奥地には旧跡と伝えられるものがあると聞く。

永仁5年(1297年)、焼亡したが越前宝慶寺より転任された義雲管主が復興。その故を以て義雲管主を中興の祖と讃え称するという。

永平寺は、北朝5代目の後円融天皇(百代後

小松天皇の父帝)の勅詔によって日本曹洞第一道場の勅額を授けられた。後、室町末期に兵火に遇ったりしたが、江戸期に至り二代将軍の徳川秀忠公より法度が下し置かれ、大本山としての地位が揺るがぬものとなった。

十萬坪の広大な寺域には、所謂七堂伽藍を始めとして数十をかぞえる建物がゆったり並び、法堂あたりから眺望する景観は素晴らしい。

まずとてつもない大きな山門が眼を奪う。間口九間、奥行五間の高い楼上には、釈迦牟尼仏を中央にして五百羅漢が安置されており、外観内容共にその重厚さは他に此を見ないの感がある。寛延2年(1749)に改築した永平寺最古の建造物との事。

鎌倉様式の鐘楼堂には、なんと口径1.5米高さ3米、重さ5トンの大梵鐘が吊るされており、一杵ごとに一拝をして撞く鐘の音色は、生きとし生けるものに無限の慈愛を伝える極楽の音色。

短い時間でいちいち拝観は出来なかったが、寺宝は数えるに暇がない程。古文書・曼陀羅図・画像・書軸・経巻などなど、天皇の御宸筆、名僧の書・狩野派の絵画、信長・秀吉の禁制文、判物、ずっと時代が下っては、明治大正の政財界の著名人揮毫の墨跡の軸など数多くあり、今ひとつ特筆したいのは、永平寺64世の管主大休

悟由師の事。大谷より出身された郷土の誇りこの上もないお方である。

信仰と修業の殿堂、大本山永平寺をあとにして次の予定地、越前朝倉氏の館跡へと向う。

九頭竜川の流れに添うようにして南下するバスの中から眺める遠近^{おちこち}の山々の裾を彩る黄葉紅葉の鮮かさに、一同感嘆の声を上げる。

〽九頭竜の山とめ行くや紅葉晴れ

九頭竜湖澄みなだるるや紅葉山 定子

やがて着いた朝倉遺跡は、樹々の茂る丘の谷あい^あに延々2キロも続く細長い地形をなして一乗谷と言われる。城下町の名残りとは一寸信じ難い程、何ものもとどめていない。唯、当時を知る手掛かりとして発掘指定地区があり、考古学者達であろうか、数人の人の影が静かに動いて見える。谷あいと山の中腹を利用した狭い土地^{はく}がかつては、京風の雅びを好み、文化を育くんだ朝倉家の城下町であったとは、城跡をめぐる五間足らずの堀は幅せまきまで雑草が生い茂り、橋桁に、やかた橋とするされていて滅亡

した朝倉館跡の名残りを偲ぶるべとも見えた。

千坪余りもあろうと思う城あとを右手にゆくと、朝倉義景夫人の、小少将の邸跡に辿り着く。ここには湧泉石組や庭園跡らしい植込みや石が置かれてあり、夫人の優雅な暮らしぶりも窺える。

朝倉、浅井を滅ぼした信長も滅び、そしてまた天下を掌握した秀吉も滅び、今はつわもの共の夢のあとかたもない。もの言える草木などがあれば昔のことなど聞こえるかも知れないが辺りは唯寂としているのみである。

最後に関の刃物センターに立ち寄る。ここでもあれこれ物色しては土産を買い込み、天候も悪くなりかけて帰路を急ぐ。今回はベテランガイドさんが二日間中、手に取るように行く道々の説明をして下さって旅を楽しくして頂き、運転手さんの安全運転に、無事常滑に着いて一同心より感謝してお別れをしました。皆さんお疲れ様でした。

友の会学習会の近況について

片山忠義

友の会は以前より「郷土史古文書やきもの」講座を開設して来ました。これらは講師の先生を依頼するのではなく会員相互に研究を発表して運営はQandA方式で和気藹々と楽しく学習しています。

先ず郷土史（原則として第二日曜日）は昨年より北条セギの人々から自らの体験等を交えた土地のしきたり信仰、教育、独特の方言等を数回にわたり話し合ってきました。奥条地区ではこれまで殆んど人に知られていない「水道山」の事柄、現在半田街道沿いの市営住宅団地入口にその顕彰碑が立っています。

当時水に困っていた小学校や町役場に給水するため奥条の篤志家が奥条古道に水資源を見つけ千四百余間の水道を私財を投じ敷設、その後人口の増加にともない一般家庭にも給水を始めたのである。その時の苦心談等のエピソードを古老より聴きました。

次に大野の町は大野在位の会員の御努力に依り「大野町誌」抜粋をテキストにして町の生い立ちから時代順を追って懇切な解説をききました。

3月5日には今日迄残る歴史的遺産の見学会を催しましたが此の試みは大変好評で今後も機

会があれば実行したいと思っています。

古文書は(原則として第三日曜日)茶道石州流の秘伝書の解説を続けて来ましたが昨年末に終了、本年からは尾張藩船総庄屋中村権右衛門家の文書を北川、河合両氏の指導のもと学習を続けます。

昨今「伊勢湾海運の歴史」が各方面で脚光を浴びています。時宜に適した学習として大いに期待をしています。

やきもの部会(原則として第四日曜日)は私

達は兼ねてより常滑焼の歴史書の記述に疑問をもって来ました。近年の考古学の発達や古窯の発掘による新しい事実の発見があり種々の問題点を知る事が出来ました。

今後は此の事実を会員内の理解だけに止まらず広く外に向け積極的に発表して行くつもりです。

どうか会員の皆様も以上三つの学習会に参加して頂き、知る事の喜びを分かち会おうではありませんか。

『濱口屋久田家』展のお知らせ

3月恒例の「わが家の歴史展」は西阿野の久田和彦氏にお願いして、『濱口屋久田家』展を開催することになりました。

久田家は初代榮藏(1789~1867)以来、西阿野地区の名門として江戸時代から栄えた由緒ある家柄です。中でも4代目に当たる豊三郎(1855~1938)は、明治10年(1877)に数え年23才の若さで窯を築いて製陶業を始めましたが、性格が進取の気性に富んでいましたので、当時の窯業学界第一人者だった藤江永孝の指導を受けたり、土管機・両面焚倒焰式石炭窯・電動機などの最新技術を業界に先駆けて導入しました。従いまして久田家には他所では見られないような製陶に関する文書が沢山所蔵されています。

従いまして今回の企画展では、久田家の江戸時代の文書や4代目豊三郎の製陶に関する文書・郵便物を展示しますが、そのほかにも当時入手した陶芸・美術品などもご紹介いたします。杉江滄軒(1881~1963)の虎やガマ・富本幸吉(梅月)(1861~1939)の昇竜やガマの陶彫をはじめとして、不識壺・急須・菓子鉢・茶碗類の陶芸品など、いずれも絶賛されるべき作品群が並びます。更に、梅逸・梅荘・石叟等の描いた掛け軸・額などの美術品、江戸時代の櫃・明治時代の弁当箱のようなめずらしい諸道具類まで展示されますので、実に見応えのある企画展になると思います。会期は3月25日より4月30日までです。皆さんお誘い合わせの上、多数ご来館されますようお願い致します。

春の日帰り研修旅行のお知らせ

今回の日帰り旅行は、近い場所でありながら行きづらい所と考えて企画いたしました。

始めは天理参考館で、天理周辺で出土した縄文式土器をはじめ、中国、朝鮮、ギリシャ、エジプトなどの考古美術品や世界各国の民俗資料等が展示されています。

次は石上神宮、本殿は近世の建築物ですが、拝殿のほうは鎌倉時代の建物で、拝殿としては最も古いものに属しています。他に鎌倉時代の楼門等があります。

昼食後は「中世の町並みを現在に伝える今井町」へ参ります。今井町と言ってもごぞんじない方が大半かと思いますが、東西610m、南北310mの中に約600軒余りの民家があり、その内500軒余りが江戸時代の建物で、うち8軒が国の重要文化財、2軒が県の文化財にそれぞれ指定されており、町全体が文化財でもあります。今回は国の重要文化財の内、今西家住宅(今井町を支配した惣年寄を代々勤めた家柄)、旧米谷家住宅(屋号を「米忠」という金具商であった家)を見学する予定です。

お友達をお誘い合わせ上、多数ご参加下さいますようお願い申し上げます。

- (1) 日 時 平成7年5月11日(木)
- (2) 会 費 1人 6,000円

第17号、平成7年(1995)3月25日発行、発行所 常滑市民俗資料館友の会、常滑市瀬木町4-203
電話(0569)34-5290 編集担当者 中野健三 印刷 株式会社 好文